



『この^{もん}門を 入れ^いば 涼風^{りょうふう} おのづから』

私が修行させて頂いた京都南禅寺の三門の手前には、巨石に彫られたこの句が杉林の木漏れ陽の揺らぎにしずかに調和していました。詠まれたのは伊万里市にある南禅寺派圓通寺の森永湛堂老師だそうです。夏の暑い日、托鉢を終えて三門まで到着するといつもこの句に迎えられたものでした。

山門と書かずに三門とするのには訳があります。仏教は生きながらにして成仏することを目的とします。そのためには先ず執着や束縛から解放されなければなりません。解放されなければとは言うものの、自縄自縛ですので縛っているものと縛られているものの正体を突き止めなくてはなりません。ところが突き止めようとすればするほど自身も自分以外も何の実態もないことに気付かされます。これを解脱と言っても良いでしょう。三門の三とは、「空・無相・無作」を意味し、つまり無常であり何の実態もないことに気付くことが、修行の最初の関門なのです。この関門（三解脱門）を透過して初めて入口に差し掛かったと言えるのです。しかしこの自縛からの解放だけでも昨日までの自分とはまるで違ったような本来の自己に立ち帰ることが出来るのです。「この門を 入れば涼風 おのづから」の句は、束縛も“おのづから”であると同時に、開放も“おのづから”であったのです。その時さわやかな涼風を実感できるのでしょうね。ずっと前から、最初っから吹いていたのに…